

清代における蒙古字韻の利用—蔡美彪説

吉池孝一

一

先ごろ「清代のパスパ文字研究」(2007)というものを書いた。その主旨は「18世紀末の清朝人によって『蒙古字韻』を利用し元代貨幣や印鑑のパスパ文字漢語の判読が為されたことを明らかにし、それをパスパ文字研究史の中に位置づける。」というものである。

『欽定錢録』(1750年)、『江秋史錢譜』(古泉彙攷より稍早い時期)、『古泉彙攷』(1786年頃)、『吉金所見録』(1819年)などによりパスパ文字漢語の判読を跡付け、『江秋史錢譜』の著者江秋史や『古泉彙攷』の著者翁宜泉が、『蒙古字韻』を利用してパスパ文字錢や印章を判読したことを述べた。論考の中心は翁宜泉の『古泉彙攷』であった。

その後、蔡美彪氏が、既に1958年に翁宜泉の『蒙古字韻』の利用に言及していることに気づいた。迂闊なことであった。

以下、蔡氏の指摘を引用する。

二

『八思巴字與元代漢語』(羅常培 蔡美彪合編、科学出版社、1959年)の92頁に次のようにある。

補記：翁氏古泉彙攷抄稿，近已由北京圖書館收藏。頃檢此稿，確已引據蒙古字韻以考釋元代錢幣，但對此書情況，是抄本還是寫本，並無說明。

一九五八年三月美彪又記。

『蒙古字韻』の利用について述べていること明らかである。ただ、具体的な内容への言及はない。拙論も蔡美彪氏説の補足としてならば、いくらか利用価値はあるかもしれない。いずれにしても蔡氏の指摘は研究史において見過ごすことのできないものであるゆえ一言した次第である。

参考文献

吉池孝一2007.「清代のパスパ文字研究」,『愛知県立大学外国語学部 紀要(言語・文学編)』39号, 381-395頁。